

第17期 第3回小平市緑化推進委員会 会議要旨

- 開催日時 令和3年1月22日（金）午後3時～午後5時
- 開催場所 小平市役所 5階 505会議室
- 出席者 椎名委員長、小川委員、市川委員、船津委員、白井委員、八田委員、粕谷委員、菊地委員、塩島委員、中村委員、米山委員、和田委員（順不同）
- 傍聴人 2名
- 議題 第17期小平市緑化推進委員会の検討課題について
- 配付資料 (1) 第17期 第3回小平市緑化推進委員会次第
(2) (仮称)小平市第三次みどりの基本計画（案）（資料1）
(3) (仮称)鎌倉公園整備基本計画（素案）（資料2）
(4) 農業公園の事例（資料3）
(5) J R武蔵野線トンネル湧水の活用による流水再生に向けた用水路整備について（資料4）
(6) 小平市内におけるナラ枯れの発生状況（資料5）
(7) 小平市立公園等一覧（資料6）

会議の要旨

事務局より資料1から資料6について説明があった。説明後以下のとおり質疑があった。

委員

「(仮称) 鎌倉公園整備基本計画（素案）」（資料2）の中で P25 公園管理運営体制の検討の表の中でいくつかの体制が挙げられているが、Park-PFI という方法もあるためそれも挙げてはどうか。

事務局

こちらの表では例を挙げており、Park-PFI 方式については PFI 方式に含めた捉えとしている。

委員

「農業公園の事例」（資料3）について、専門家が栽培した果樹園などの収穫物だけを購入できる制度等の事例はないか。

事務局

具体的な事例は把握していない。また、（仮称）鎌倉公園における農に関するプログラムの内容は決まっていないため、様々なことを想定して担当部署と調整していく。

委員長

市の部署毎や民間で貸し農園等を行っているため、ヒエラルキーを作ってはいけないか等の検証をすべき。差別化が起こり、何が得かなどの話になってしまう。また、果樹園などは民間の農家を圧迫してしまう可能性があるため、それも考慮してほしい。

委員

先日、市報の記事に体験農園の募集が載っていたが、それは産業振興課が行っているものか。

委員

体験農園について、小平では体験農園園主会が行っており、市内5か所に点在するように配置され、どこの地域の方も手が届きやすいようになっている。利用者が非常に多く好評を得ているが、新規利用者と辞める人が同数程度である。

個人的な意見だが、行政と民間が同じ内容で体験農園を行うと競合とすることとなる。体験農園を行うだけの考えでなく、障がい者や子どもたちの農業体験など福祉や教育機能の面を持たせ、行政と民間とのすみ分けができればいいのではないかと考える。

委員長

行政と民間の区分けをどうするかなど運営方法が重要になってくる。また、管理方法について、市内の農家の力を活用するなど方法もあるため検討してほしい。

次に、「JR武蔵野線トンネル湧水の活用による流水再生に向けた用水路整備について」（資料4）について、放流量が1日最大2,880 m³となっているが、この水量に対する下水道料金を調べておいてほしい。

また、これ以上の放流は厳しい状況という記載があるが、内容を詳しく教えてほしい。

事務局

電車が通るトンネルであるため、大きな配管の設備をトンネル内に設置できないことから、放流量に制限がかかる。

委員長

次に、委員で認識を共有するため、ナラ枯れについて説明する。

ナラ枯れ病は、カシノナガキクイムシを媒介とした伝染病で、この昆虫の食害によってナラ菌（カビの仲間）が幹内部に散布され、繁殖することが被害と原因となる。被害樹種はコナラ、ミズナラなどナラ、シイ、カシ類に及ぶ。被害の特徴は、夏季に真っ赤に枯れる、樹冠全体が枯れ症状となることが多い、症状が急激であるといったものがある。この昆虫は外国等からの外来種ではなく、古くから日本に住み着いていたものと考えられている。雑木林の管理の放棄等から、繁殖の最適環境が生まれたと言われている。小平市内では 2019 年にわずかであるが発生が確認され、2020 年には本格的に被害が拡大している。多くの都立公園でも 2019 年にはナラ枯れ症状が確認され、2020 年には被害が大きくなっている。

カシノナガキクイムシは、長さ 5 mm 弱の昆虫で大径木の中に穿入して生息する養菌性クイムシであり、雌雄は一夫一妻制である。穿入孔は高さ 2m ぐらいまでに集中しているが、マスアタックを受けた木は 4~5m ぐらいの高さまであるものもある。孔は爪楊枝の先が入る小さなもので、孔の周辺にフラスが付着していることが多いので分かりやすいが、台風等強い風雨にさらされると消失し分かりづらくなる。マスアタックとは、1 匹のオスが樹幹に穿入し、集合フェロモンを発散させ、メスだけでなく他のオスも呼び込み、さらにそのオスが集合フェロモンを出すことで増え続けることで、1 本の樹木に大量のカシノナガキクイムシが穿入し急激な枯れ症状を起こすことを言う。フラスとは、白色がかった肌色のきめ細かい粒子状のもので、カシノナガキクイムシが穿入して削った木屑と糞が混じったものであり、穿入孔から排出され木の根元に大量に集積していることが多い。被害木の樹幹断面を見ると、表皮の近くの内側が円周状に太い幅で黒くなっており、これがナラ菌に侵された部分である。樹木はナラ菌に侵されると、油状のいろいろな物質を生産し、これが導管内に溢れ、水の流れが妨げられることで梢端部に水が上がらなくなり、突如として枯れ死に至る。

カシノナガキクイムシによるナラ枯れ病は 1 年 1 年が単位の病気である。6 月に発生し、6~8 月に健全木に対してマスアタック攻撃をし、1~2 週間で枯れるものは枯れ、生き残る木はそのまま生存し続ける。主に枯れた木には沢山の幼虫が住みつき、成長して成虫となって翌年 6 月に新たな健全木を求めて一斉に飛び立つという生態がある。この生態を利用し、周辺環境などを考慮して、その雑木林にあった防除・駆除方法を検討しなければならない。

都立公園のナラ枯れ病の被害状況をみると、小平市と同様に 2019 年から始まっており、2020 年には増加している。被害樹種をみると、圧倒的にコナラが多く、主にコナラで構成されている小平の雑木林での被害リスクは非常に高い。ナラ枯れ病による枯れ死木は、たくさんのカシノナガキクイムシの幼虫を抱え育てている立木の丸太であり、翌年には成虫を発生させるものであり、また、落枝や倒木による事故発生の安全性にかかわる案件となるため、年度末までに伐採処理を終了しなければならない。カシノナガキクイムシが穿入しても枯れずに生存している穿入生存木の取り扱いについて、1 度死を免れた木は次年度以降に再度加害を受けても枯れ死する確率が低く、カシノナガキクイムシにとって樹体内の環境は悪化し繁殖に失敗するため、残しておいた方がカシノナガキクイムシ個体数低下に寄与するため得

策であるという見解もある。

森林総研関西支所のデータで幹の太さと被害の違いと被害部位があり、幹の太さによる被害の程度の違いは顕著である。細い幹のものは枯れ死しにくく、太い幹のものは枯れやすい。胸高直径 24cm（幹周 70cm）までは枯れが 10%以下である一方、胸高直径 36cm（幹周 113cm）以上では 100%枯れている。このことで萌芽更新している雑木林では被害が少ないことを物語っている。

都内での今後の動向については予断を許さないが、愛知県の被害状況を参考にみると、2年目で 10 倍、3年目で 17 倍となり、おおまかに 5 年間にわたって被害が続いていたことが分かる。樹木自体の違い、生育環境の違いがあり確実なものでないかもしれないが、万全の対策を講じてこのくらいの水準で終結を目指すべきであろう。

ナラ枯れ病の見分け方は、10 月までの時期に紅葉したような葉色で見分けるのが確実である。しかし、やがて赤色から枯れ色へと変化してしまうため定期的観察が必要である。また、似たような多くの種類のキクイムシが存在するため、最終的にカシノナガキクイムシだと確定するには、成虫を捕獲して検査機関で識別する必要がある。

カシノナガキクイムシの対策は、はっきり言ってあまりないが、発生調査として、調査事項は被害木、全枯れ死木、穿孔生存木の識別、夏季調査によるマーキングであり、駆除対策時にはマスアタック樹木の特定が必要となる。予防対策は、薬剤樹幹注入、粘着剤塗布、ビニールシート等幹被覆、伐倒燻蒸・立木燻蒸、伐倒破碎処理がある。駆除対策は、おとり丸太トラップ法、クリアファイルトラップ法、ペットボトル等トラップ法がある。4・5 月が予防対策期、6 月から 10 月が発生調査・症状記録・駆除対策期、9 月から翌 5 月が伐倒燻蒸等対策期となる。

ナラ枯れ病の大きな要因として、立証されてはいないが、コナラ等樹木の太径化してしまったのが大きいとされている。細い木や枝の場合、枯れた後早い乾燥が進んでしまうため太い木を好むとの仮説が立てられている。穿孔生存木の場合、フラスがでるのではなく、樹液が幹の穿孔から湧出していることが多く、その穿孔では樹木がカシノナガキクイムシに勝った状態が生まれているとの説もある。かつては、薪や炭に利用するため直径 25 cm（幹周 70 cm）以下で伐採され萌芽更新されていて、カシノナガキクイムシは存在していたものの、この太さでは大被害には繋がらなかったと推察される。

ナラ枯れ病の猛威は数年にわたって続き、多くの雑木が枯れ死することから、雑木林の更新が主要な課題として大きく浮上することは間違いないと推測される。どんぐりの里親制度を拡充整備して利用することが必要である。ナラ枯れ病への対策について、安全管理のための枯れ木処理はもちろんのこと、穿孔生存木の比率を上げるための予防・駆除対策と次世代コナラ等雑木の育成更新の両輪での対策を検討すべきである。

ナラ枯れ病の予防・駆除の効果的な対策について、小平市周辺の管理を行う小平市、隣接市、東京都、民間等の全てが連携して行うのが最善であるが、手続きが困難で時間もかかる。また、今年 6 月には膨大なカシノナガキクイムシの成虫がマスアタックをするのは確実であることから駆除対策が必要である。現在の対策の中で、クリアファイルによるトラップ駆除

法は安価で、穿入生存木の割合の向上が図れることが静岡県農林技術研究所の実験でも証明されており、試験的に実施してみる価値は十分あると考えられる。この方法は、接道している等の複数の樹木に設置し、1週間ほど様子を見て、他よりもたくさんのカシノナガキクイムシが入っているトラップがあり、それがマスアタックを受ける樹木となるためトラップの追加設置を行う。これを6月頃から行うものである。

以上がナラ枯れ病についての説明となる。

委員

ナラ枯れにより枯れた木はエサになってしまうということだが、資料5の小平市において確認しているナラ枯れについては、伐採したのか。

事務局

水と緑と公園課の管轄では、129本を伐採している。

委員

松の木通りなど通学路になっているため、できれば倒木の可能性があるなどを学校と情報共有などは行ってもらえるとありがたい。

委員長

ナラ枯れ病の枯れ木を年度末までに対応するべきであると説明したことについて、6月になると成虫となりマスアタックが起り、被害が拡大するためという理由である。落枝については高い箇所に入る虫ではないことや、倒木については根を腐らせるような虫ではないことから、絶対ではないが可能性は少ないものである。

委員

説明のあった予防や駆除対策について、小平市は行っているか。

事務局

ナラ枯れ病について、今年度から多くみられたため対応したため予防や駆除対策は行っていない。今後について、活動期になるまでにどう対応するのかを検討していく。

委員長

薬剤注入などは薬剤の費用がとても高く税金で行えるものではない。また、その予防対策を行っても100%防げるものではない。そのため、予防という観点では決定的な対策はない。また、都市経営という観点からみても出せる費用ではない。ビニールシート等幹被覆については、多くの労力が必要となる。

前回、話のあった緊急提言についてはどう思うか。

委員

いくつかの公園の管理に携わっているがナラ枯れ病が多く発生している。発生してしまうのは仕方のない状況だと思うが、数を減らすようなことはできないか。

委員長

緊急提言できるとすれば、クリアファイルトラップ法を試験的にでもやってみてはどうかという内容かと思う。その対応を行えば、その後の枯れ死木が少なくなると考える。枯れた後に伐倒破砕処理するよりも、クリアファイルトラップ法による対策の方が費用はかからない。あとは、作成と巡回、取り付けの手間はかかるが実施の規模で調整すればと思う。緊急提言としては、これを実施し枯れ木を少なくすること、他に含めるとすれば育成システムを作成し雑木林の更新の礎を作ってはどうかといった内容かと思う。

通常の提言書の提出方法には沿わず、次回、提言内容をまとめた書類を作成し、委員に承認をもらって事務局に渡すといった形で緊急提言としようかと思う。

この事案以外に提案等あるか。

委員

ボランティア活動促進として杉並区が「長寿応援ポイント」を行っている。杉並区主催行事等の団体活動に参加すれば1回ごとに1～5ポイントのシールが貰え、貯まれば区内の商業施設で買い物ができる商品券と交換ができる制度である。高齢者の地域との交流機会を増やし、健康・長寿にも役に立つものである。小平市でも導入を検討する場合は、高齢者に限定せず、幅広い年代層を対象とすれば「オールこいだいら」の意識涵養につながるのではないか。このことで、最寄りの公園や緑地帯への関心を深めていただき、市民自身が自分たちの緑を守る方向への踏み出しが必要ではないか。

また、他の事例に落葉感謝祭がある。これも杉並区の事例だが、やっかい者扱いされる落ち葉を、夏は涼しい木陰を提供し、きれいな空気を作ってくれる落ち葉に感謝を、という落ち葉感謝月間を設け、感謝祭を行っている。小平でも、玉川上水の周りでも多く発生している。落ち葉は、時間はかかるが堆肥にもできるため、そういった落ち葉資源を活用できないかと思う。

委員長

杉並区と同様のものを行うとなると所管が複数にまたがりなかなか実施も難しくなるため、実現しやすい方法を模索するといいかもかもしれない。

委員

公園を整備する際などに、落ち葉を集め堆肥にするところを見せる場所を設けてはどうか。そしてその堆肥を活用する場所もあればなおよい。

委員長

堆肥というためには基準があるため難しさはあるが、東大和市では落ち葉を集め堆積させている場所を設けており、自由に持っていけるような状況にしているような例もある。人気があるらしい。

委員

家庭用の生ごみを回収して堆肥化するプロジェクトに参加しているが、これに落ち葉を加え各家庭から回収はできないか。

委員長

樹種により堆肥になる時間が異なるため、落ち葉毎に分別が必要となる。枝などはさらに時間がかかるため、分別して集める場所を設ければよい。落ち葉感謝祭のように人員を集める工夫と施設を設ける方法を検討するのはいいかもしれない。落ち葉の収集に協力していただいた方に雨どい清掃券のようなものを配り、落ち葉が雨どいにたまるような時期に行使できるようにするのもいいかもしれない。

他に提案はあるか。

委員

歴史的に価値のある用水路について、今後もきちんとした維持管理を行っていただくことや小平市民に今まで以上にアピールしていくことは重要だと思う。テレビで、小平は江戸時代に水が乏しく農業に不向きであった土地に、玉川上水から用水路を整備して水を引くことで村が誕生したと言っていた。小平の歴史そのものとも言える用水路を、緑化推進委員会としても、小平市民に価値の再認識やアピールする必要があると思う。

アピール方法として、用水路の分岐など特別な地点にチェックポイントを作って散策コースとしてパンフレットやHPなどによる紹介、水門などの特別な地点の現場、特に住宅地であるが鈴木用水と田無用水が交差する地点に可能であれば案内看板を設置するのがいいかと思う。小中学校で子供たちの環境学習など、今まで以上に用水路の歴史的な価値を小平市民に再認識してもらう必要があると思う。また、用水路の水を活用した畑など作ってみるのもいいかと考える。再認識やアピールする手段を緑化推進委員会で検討する必要があるのではないかと思う。

次に提供公園について、小規模な提供公園はあまり個性がないように思う。こういった小規模な提供公園について、条例など何らかの仕組みを活用して、数個を統合して、面積を広く確保した公園を一箇所に作れないかと考える。また、遊具などに個性を持たせ、動物の形をした滑り台や土管のある公園というように、目的に応じ、公園利用者が選択できる公園があればいいとも思う。個人的には、ケヤキまんなか公園は、ケヤキの大木が公園の真ん中にどんと存在するシンプルな公園ですが、ケヤキの存在感があつて良い公園のひとつだと思う。今後、さらに利用者に満足してもらうため、予算を確保し、毎年数園ずつ、リニューアルし

ていただければと思う。

最後に、小平市のキャッチフレーズは「都心から一番近いプチ田舎」のため、緑化推進委員会としても、このキャッチフレーズを活かして取り組む必要があると思う。その中でも、鎌倉公園について、都市農業を活かした都市公園として、何ら提言できればと思う。

委員

用水路に関しては同意見である。緑化のものは水であるため、水を前面に出すことで、緑を大切にすることにつながる。用水路は小平遺産であると考えているため、水を前面に出していけばよいのではないかと思う。

提供公園について、屋敷林がある土地所有者が開発業者に売り、住宅を建てるため木が伐採されもともとの林が無くなってしまうため、それを防ぐために、できれば市で買い上げて林を残すことができればと考える。

委員長

本日はここまでとし、次回に再度、議論できればと思う。

以上